

えが同じです。公式を忘れてしまって計算できません。公式を考え理解されていないためです。指導にも問題があります。「車1台と蝶3匹、両方をたすといくつですか?」「答えは4です」という授業を見たことがあります。

習得でも活用でも、理解の仕方を考えさせないといけません。また、習得はただ覚えれば良いというものではなく、使えるようになければなりません。

### III、学力向上の課題

子どもの生活の面が子どもの学力に影響しています。子どもの生活を考えないと、学力の向上・指導の改善に繋がりません。

(1) 文科省で実施した学力テストと子どもの生活とを対比した結果、早寝・早起き・朝摂食の子どもの方が成績が良かった結果が見られました。

訓では、活用型の授業を実施の場でいかにクリアーするかが課題であります。

それぞれの学習では、習得も大事、活用も大事です。習得型の授業、活用型の授業とは、学習のタイプ・授業のタイプ分けであります。詰め込み型の授業が習得型の授業と考えられていますが、習得型の授業でも、考えることは必要です。

体験的学習が課題です。間接的体験は豊富ですが、直接的体験が不足しています。特に、昭和40年代からの中子化の時代、それまで屋外で群れて遊んでいた子どもたちが、子ども部屋を与えられ、一人遊び用のおもちゃ（合体型、怪獣リカちゃん）やゲーム、スナック菓子、缶入りジュース等、自分の部屋で一人で過ごせるようになつて、直接体験が少なくなりました。体験がないために子どもに学びの手立てがありません。教科書を書いてあることを暗記する以外に学びの手立てがないのです。

以前、大学に入ってきた1年生に紙を渡して、「トンボを下から

(3) 体験 生活の変化と関連して、

(2) 学習習慣 家庭学習の有無で、大きく差が出てきます。明治以来の伝統に、小学校では学年×10分1年生は10分→6年生は60分の家庭学習（宿題）。地域によっては学年×15分もあります。毎日少しずつ努力する事が大切です。

学校の出来事を親に話す子、学校のルールを守る子も学力が向上します。

(1) 従つて、1時間目に体育の授業 給食後に国語・算数という学校もあります。

夜遅くまで起きいて、朝食抜きで登校すると、脳へのエネルギーが不足して学習が出来ないと言われています。

「見た絵を描きなさい」というと、描くことが出来ませんでした。『先生、教科書の絵は上からしか描いてありません』と言うので、「絵じやなくて遊んだことはないのか？」と聞くと、「遊んだことはない」という答えでした。第2問目に「トンボの羽はなぜ4枚が?」そしたら、「そんな馬鹿なこと考えたことない」と言うので、「これは考える問題ではなくて、トンボの前の羽や後の羽を取つて飛ばしてみるとかして、遊んだことはないの?」と言うと「そんなことをしたことがない」といいます。トンボは垂直運動と水平運動を同時にやるために羽が4枚必要なのです。第3問目は「チヨウチヨはひらひら飛ぶのに、同じような姿をした蟻はなぜ直線的に飛ぶのか?」学生は、また、「そんな馬鹿なこと考えたこともない」という。それは、「チヨウチヨはは昼間の生き物で敵にねらわれやすいから身を翻して飛ぶが、蟻は夜の生き物だから、鳥にねらわれる心配がないから直線的に飛ぶんだ」と答えたら、「どうしてそんなことが分かるんですか?」というので、「こういうのが科学的に推測する、科学的に考えるということなんだ」といつても、そういうことが分からぬのが今の学生でした。与えられた情報をただ鵜呑みにするだけでは、その知識は身に付きません。

入学してきた学生に、半年経つた10月頃、入学試験と同じ問題をもう一度やらせてみました。知識が定着していないため、7・8割は忘れていました。学力がはげ落ちています。

この問題が多くれ少なかれ生じております。子どもの直接体験不足から、教科書でいろんな事を学んでも何のことか分からぬのです。ただ、暗記していくだけで、使いもせず、時間とともににはげ落ちてしまいます。従つて、授業を豊にしないとなりません。

教師に必要なこと

① 子どもの理解が必要です。観察・解釈・診断・手立てを考えることが重要です。

例えば、(観察)窓の外を見ている生徒、なぜ外を見ているのか。(解釈)数学の授業がつまらない。(診断)心の内を読み取る、どうしたら授業に集中させられるか。(手立て)を考える教師を育てたい。解釈には先輩の意見や保護者の説明も必要です。

② 習得力・活用力を高める授業の工夫が益々重要なとされています。子どもが自ら考えるようにしむける指導に心掛けたいのです。小学校では、個々の児童の学び方の個性に合わせたきめ細かな指導も大切であるが、学級としての学び合う風土の形成も重要です。

平成24年度 東京都教育会 役員総会記念講演（要旨）

## 演題：『学力向上と授業の改善』

講 師 : 東京学芸大学名誉教授 児島邦宏



はじめに  
　　今田は、校長先生方の集まりであ

はじめに  
今日は、校長先生方の集まりであると聞いてまいりました。  
私の専門は、カリキュラム開発・マネジメント及び学校改善を中心とする「組織と文化」がテーマです。方法的には、事例法による学校調査で、これまでに550校ほどの学校を参观してきました。  
今、教育現場の指導の在り方が気になつております。  
**I、学習指導要領の改訂**  
(1) 新しい教育基本法の教育の目的  
が、学習指導要領に盛り込まれています。例えば、「公共の精神」今までの子どもたちには公が伝わってなく、私の部分がふくらんでいて、公のルールの問題が抜けています。  
教育基本法の教育の目標を、指導のレベルにおけるのは大変です。  
(2) 学習指導要領の理念は、「生きる力」を継承しています。OBCTでは、世界中の子どもたちが身に付けておかなければならぬ力「キーパーソンシティンシー」(主要能力)を、「困難な世の中を生き抜くためにどうしても必要な力」と唱えていましたが、これは我が国が10年前から言つてきた「生きる力」と同じであります。  
ただし、今までやつてきたことと同じで良いという訳ではありません。「生きる力」を引き継ぎながら深く捉え直していくことが重要であります。先ず、「生きる力」の中身について

て検討する必要があります。

① 自己の確立（主体性） 自己の充実が必要です。

② 他者との関係 少子高齢化とともに、人間関係の希薄化が問題となっています。

小学6年生の「実際の赤ちゃんとを扱う」授業を参観したことあります。男子児童が抱くと赤ちゃんが泣いてむずがり、女子児童が抱くと泣きやんといました。男子児童は、赤ちゃんと接した経験がないので、うまく扱いが出来なかつたのです。これが10年後には親になる世代の今の子どもたちの現状です。

老人・大人・子ども・赤ちゃんなどの人間関係が国際的にも問題になつています。心の問題、社会性の問題として提えることが必要です。

③ 自然や社会との関係 環境問題、人権問題として捉えることです。

## II、学力の問題

二項対立的学力観から脱却して構成的（総合的）学力観へ、考えが変わっています。新学習指導要領の学力モデルを図で示すと次のようになります。

習得→活用→探究と積み上げていく学力です。直線的ではなく、戻ることもあります。層的な学力観、重ね餅の学力観です。それらの土台となります。

図 新学習指導要領の学力モデル

			自立した社会人			
			↑			
Ⅲ層	探究（生きる力・キーコンピテンシー）					
	主体性（自己の確立）	自己と他者の関係	個人と自然・社会との関係			
Ⅱ層	活用					
	知識・技能の活用	価値の判断・選択 自主的実践的態度・能力	心身の健康の維持・増進 身体能力			
Ⅰ層	習得					
	基礎的・基本的な知識・技能の習得	基本的な習慣形成 (生活習慣・学習習慣・運動習慣)	基礎体力・基本的運動能力			
基層	言語・体験					
	知的活動の基礎としての言語 コミュニケーションの基礎としての言語	自然体験 心の体験	社会体験 身体的体験	文化体験	生活体験	